

華麗なる恋の舞台で

2007(平成19)年3月10日鑑賞〈テアトル梅田〉

★★★★



監督＝イシュトヴァン・サボー／原作＝サマセット・モーム『劇場』（新潮文庫刊）／出演＝アネット・ベニング／ジェレミー・アイアンズ／マイケル・ガンボン／ブルース・グリーンウッド／ミリアム・マーゴリーズ／ジュリエット・ステイヴンソン／ショーン・エヴァンス／ルーシー・パンチ／トム・スターリッジ（アルシネテラン配給／2004年カナダ・アメリカ・ハンガリー・イギリス映画／104分）

……美貌と人気を誇る40代の舞台女優にも更年期症状が……？ 1930年代のロンドンの劇場を舞台に展開される、そんなヒロインを軸としたおしゃれでちょっといじわる、そして皮肉いっぱい的人生ドラマのポイントは、若い青年との恋……。男は単純だが、女はしたたか。そんな華麗なる舞台上でラストに展開されるアッと驚くハイライトシーンは超見モノ……？

女はわからん……？

1938年、ロンドン。美貌と実力を兼ね備えた今をとときめく舞台女優ジュリア・ランバート（アネット・ベニング）は、夫であり、シドズ劇場の経営者であるマイケル・ゴセリン（ジェレミー・アイアンズ）とその時代には珍しく、パートナー的関係の夫婦生活の中幸せに過ごしていた。しかし、ジュリアも今や40代。容色の衰えは自分自身が1番感じるものだが、それ以上の問題は、最近著しい意欲と情熱の衰え……。

疲労を理由に夫に対して休暇の要求をしたものの、「契約は契約だから」と逆に説得されたジュリアの前に、マイケルの紹介で突然現れたのが、アメリカ人のハンサムな若者トム・フェネル（ショーン・エヴァンス）。あれほどふさぎ込んでいたジュリアが、トムから甘い誘いを受け、いとも簡単に恋に落ちるとたちまち元気を回復し、演技にも意欲を示すようになるのだから、女はわからん……？ 夫以上にジュリアの身辺を見ているのが、付き人のエヴィ（ジュリエット・ステ

イーヴンソン)だが、このエヴィですらその急激な変化に驚くほどだから、私などにはジュリアの心境の変化は到底うかがい知れないもの。

映画冒頭から飛び出す、こんな40代の大舞台女優のコロコロと変わるオンナ心がこの映画のテーマであり、面白さ……？

面白いジュリアの男関係その1 マイケル

今日のように情報が発達すると、芸能人のゴシップは一瞬にして広がるが、情報通信システムがのんびりしていた1930年代のイギリスでは、その点まだまだおらかなもの。この映画のジュリアを見ているとそう思ってしまう……。

ジュリアはトムとの間にすぐにセックスの関係ができてしまうが、マイケルはジュリアのことを「彼女にセックスは無意味だ。結婚した当初こそ、うるさいほど望んだが、息子ができて変わった。すべての本能が演技に注がれたんだね」というセリフのとおりを考えていたよう。したがって、ジュリアがトムとの恋に走ることができたのは、マイケルが「束縛しない」とでもいおうか。とても近代的な夫婦なんだ」というセリフどおりに考えていたから……。したがって、まずこのようなジュリアとマイケルの夫婦関係のあり方が、ジュリアの男関係の第1の見どころ。

面白いジュリアの男関係その2 チャールズ

第2は、ちょっと不思議なタイプだが、ジュリアのプラトニックな恋人だというチャールズ・タマリー卿(ブルース・グリーンウッド)。チャールズは、すべてを打ち明けることができるというジュリアの数少ない友人の1人で、かなり親しそうだが、1度も肉体関係はない様子……。トムと別れて心の痛手を負ったジュリアがキスを求めても、チャールズはそれを拒否。しかして、その理由は……？ こんな英国紳士の登場が、いかにもサマセット・モームの『劇場』を原作としているだけに、イギリス風で面白い……？

面白いジュリアの男関係その3 トム

トムはいかにもアメリカ青年らしく、すべての面で快活で開放的。もっとも、

お金に困った話を持ち出した時は、一瞬金持ちの年増女にタカっているのかと思ったが、それは杞憂にすぎなかった。逆にジュリアから、お金はいくらでもと言われると、きっぱりとそれを拒否するところが、トムのいいところ……？ もっとも、「女たらし」は天性のものともえて、年上の女性ジュリアと新進女優のエイヴィス・クライトン（ルーシー・パンチ）をうまく掛け持ちしていたはず……？

そんなトムによって一時は振りまわされ、嫉妬に狂ったジュリアだったが、さすが一流の舞台女優。そんな心の痛手をどのように処理し、舞台女優として再生・復活するのが、この映画最大の見どころ……。

仕事に私情は禁物！

マイケルとジュリアのようなパートナーシップで公私ともに働いていると、難しいのが公と私の区別。つまり、仕事に私情を差し挟むことはないのか、ということ。その点、マイケルもジュリアもさすが一流芸能人！

マイケルとトムを通じて、次回作『十二夜』のヴァイオラ役にと推薦されたエイヴィスのオーディションでの演技力を見て、即座にその才能を見抜き、私情を差し挟むことなくエイヴィスの採用を決定したジュリアはさすが。普通はなかなかこうはいかないから、新進女優の出世のためには、先輩俳優や舞台監督への肉弾攻勢が必要なこともあるのだが……。

女の闘いはコワイ……？

トムの関心がジュリアからエイヴィスに移った後、ジュリアはまるで小娘のように怒り狂ったが、どのように気持の整理をつけたのか、今や新作の稽古に励む彼女は気持が悪いほど自分を控え目にして、エイヴィスを立てていた。そんなジュリアにマイケルは驚くが、単純な頭しか持たない男の解釈では、ジュリアは今や立派に立ち直ったんだという程度……。ところが、ジュリアがエイヴィスに対して挑んだ女の闘いは、私やマイケルが考えるほど甘いものではなかったことをまさに実感……？

さあ、今日は開幕初日！

今日はシドنز劇場における『十二夜』の初日。評判は上々。既に外には行列ができています。初日に臨んで長期の契約書へのサインを求めるマイケルに対して、エイヴィスは喜んでサインし、遂に舞台の幕が上がった。客席の後ろに立ち舞台を見守るマイケルがビックリしたのは、ジュリアの服装が稽古場で見せていた控え目な服装とは全く異なる派手なものだったこと。また、ジュリアがしゃべるセリフが途中から台本と全く違うものになり、観客の注目を集めるはずのエイヴィスの立場が一気にダウンしてしまったこと……。そのうえジュリアは、くしゃみをするエイヴィスに対して、「フィリップ卿ともベンともイチャついた。風邪をひくわけね。恥をお知り。本命はどっち？」と迫真の演技で迫ったから、エイヴィスは舞台の上で泣き崩れてしまうことに。さらに、それに追い打ちをかけるようにジュリアは……？

あの控え目な稽古に明け暮れながら、ジュリアは頭の中ではエイヴィスに対するこんなすさまじい復讐劇を描いていたのだった。そんなジュリアの最後のセリフは、「悪く思わないで。何しろ何でもありだもの。戦争と……戦争と……もう1つのもの。何だったかしら？」というもの。そんなセリフで舞台を退場するジュリアに対して、客席からは圧倒的な拍手が……。

こんな夫婦の息子は……？

両親が共に有名人で忙しい生活を送っている場合、その子供がどのように育つかは難しいところ……。この映画に登場する1人息子ロジャー・ゴセリン（トム・スターリッジ）は、同年配のトムと一見仲良く過ごしていたようだが、実はかなり繊細な神経をもった青年のよう。この映画は特別彼に焦点を当てて描いているわけではなく、あくまでジュリアとの関係で必要な限度で登場させているが、そのハイライトは、ロジャーが「すべては芝居だ」「見せかけの世界からは出ていくよ」とジュリアに対して宣言するところ。

しかし、この映画が英国風でおしゃれなのは、ジュリアとトムとの「浮気」にしても、ジュリアと1人息子ロジャーとの「対立」にしても、それをとことん深

刻に突き詰めず、どこかにゆとりを持たせているところ……？ そして、それができるのは、結局ジュリアの器の大きさのせい……？ そんなジュリアの息子だから、新作『十二夜』の初日では……？

たまにはこんな映画もしっかりと！

2007年の第79回アカデミー賞の発表を2月25日（日本時間で26日）に終えた今、『ディパーテッド』（06年）をはじめとする受賞作は売り込みに懸命だが、この『華麗なる恋の舞台で』でジュリア役を演じたアネット・ベニングは各種の主演女優賞を受賞したうえ、2005年の第77回アカデミー賞で主演女優賞にノミネートされていた。こんな映画は日本ではなかなか公開されないため、私も今回単館上映されたテアトル梅田ではじめて観ることができたもの。

ハリウッド映画とは明らかに違う、おしゃれで上品そしてユーモアと皮肉たっぷりなこんな映画を、たまにはしっかりと楽しみたいものだ。

2007(平成19)年3月13日記

ミニコラム

祝20年！『レ・ミゼラブル』！

今私の手元に2冊のパンフレットがある。88年4月12日と06年1月13日鑑賞のもの。07年元旦の読売新聞は、「レ・ミゼラブル激動の20年」と題する大特集を組んだ。87年の日本初演当時の出演者は、鹿賀丈史、滝田栄、斉藤由貴、岩崎宏美、鳳蘭、島田歌穂ら。07年のジャン・バルジャン役の1人別所哲也は当時大学生で、帝国劇場に通いつめていたらしい。土地バブルの絶頂と崩壊そして失われた10年と共に生きた20年間での上演は何と2141回！

ブロードウェイ版『レ・ミゼラブル

ル』は、87年の第41回トニー賞8部門を受賞したが、07年のトニー賞で作品賞など8部門を受賞したのは『春のめざめ』。また東京汐留の四季劇場では、03年の初演以来アメリカで大ヒット中の『ウィキッド』の上演も始まった。日本での本格的なミュージカル上演は63年の『マイ・フェアレディ』からだが、その約半分を『レ・ミゼラブル』が支えてきたことになる。祝20年！と同時に、今後も末永く上演を続けてもらいたいものだ。

2007(平成19)年7月9日